京都大学	博士(文学)	氏名	疋　田　隆　康
論文題目	古代ケルト文化とその表象に関する研究		

（論文内容の要旨）

本論文は、ローマ帝国拡大前のヨーロッパに広く居住した「ケルト」と呼ばれる人々について、その古代における実態と後世に生まれた表象とを分析することによって、実像を明らかにしようとする研究である。序論と本論７章、結論から成り、本論第１部の３章は古代における実態を、第２部の４章は古代から近代にかけてのケルト像の形成・発展を検討している。巻末に、第２章のために作成された長大な表(マトロナのエピッセット一覧）が添えられている。

論者は、論文冒頭の「序論」において、本論文の課題や研究史について解説する。それによれば、本論文の検討課題と作業手順は以下のようである。

「ケルト」と呼ばれる人々については、従来、ハルシュタット文化、より正確には鉄器文化であるハルシュタットＣ期からその歴史が始まったとされ、ヨーロッパに広く拡大したものの、次第にローマ帝国に征服されたと理解されてきた。そして、ローマによるブリテン島征服まで語られた後、いわゆる「島のケルト」、すなわちアイルランド、スコットランド、マン島、ウェールズ、コーンウォール、ブルターニュで構成される、「ケルト的辺境」と呼ばれる文化圏の人々を古代ケルト文化の継承者と見なし、これらケルト的辺境の中世以降の展開へと接続してその歴史が語られてきた。しかし、東ローマ帝国（ビザンツ帝国）や神聖ローマ帝国が「ローマ」という名称を冠していても古代ローマ帝国とは多くの相違があるように、ケルト的辺境と古代のケルトとは、同じ「ケルト」という言葉が使われていても異なるのであり、両者を接続したケルトの歴史には無理があるといわざるをえない。それにもかかわらず、20 世紀後半までこのような歴史像が描かれてきたのは、古代ケルト人の実態が数百年にわたる研究の蓄積を経ても十分に解明されていないことが大きな要因と考えられる。そこで、本論文はまず、古代ケルト人の実態を、主として古典文献と碑文史料に基づく検証を通して考察し、古代ケルト人の実像を明らかにする。それに加えて、ケルト人の歴史を理解するための重要な鍵として、中世以降のヨーロッパにおいてケルト人がいかなるものとして語られてきたのかを検討する。つまり、古代ケルト人からケルト的辺境へとつなげる従来のケルト史像を踏襲するのではなく、中世以降のヨーロッパにおける古代ケルト人の表象を分析し、ケルト像の系譜を明らかにすることで、ケルト人をどう理解するかという問題に対して重要な素材を提供し、従来とは異なる視角からケルトの歴史を捉えることを目指す。

以上の課題を受けて、第１部（第１～３章）は古代のケルト人の実態を分析する。

第１章では、古代のケルト人についての概略を、最新の研究動向に照らしつつ説明した上で、とくに王権を中心にその社会を考察している。論者は、王権の呪力や祭司的機能などの宗教的な側面と、戦争指導者としての軍事的な側面との関係を中心に論じることで、社会と宗教との関わりを明らかにするが、その結果として、古代ケルト社会においては、王とは宗教的な存在であり、神々と人間との間の関係を統制するものと見なされていたという見通しを得ている。

この第１章での前提的作業を受けて、第２章と第３章では、古代ケルト社会における宗教を、ガリアとイベリアについて詳細に分析する。まず第２章では、王権の背後にあるケルトの宗教を、ローマ征服以前から帝政期に至る信仰を通して考察し、ケルトの信仰が、ローマ支配下のガリアにおいても存続したことを確認した上で、「ローマ化」とケルトの伝統との関係へと考察を進めた。さらに、奉献碑文や呪詛の碑文の検討から、人々がローマの文化をそのまま受け入れるのではなく、まずケルトの伝統の中に取り込み、一旦消化した上で受け入れていることを読みとった。これを論者は、ケルトとローマの融合した「ガロ=ローマ」と呼ぶにふさわしい現象とする。そして、ローマ征服後、ガリアは、表面上「ローマ化」したように見えながらも、信仰が個々人の手で保持されることによって、ケルトの伝統が存続し続け、ローマの要素と融合し、ガロ=ローマと呼ばれる文化を生み出したと考えることができる、と結論する。

第３章では、イベリア半島を舞台として、ケルトイベリアのアイデンティティからローマ征服前後におけるケルト社会の変容の解明を試みる。従来のケルト研究において、古代イベリア半島のケルト人は、その特殊性と劣悪な史料状況から取り上げられることが少なかった。しかし、近年の研究の進展によりこの地の重要性が明らかになりつつある。そこで、論者はケルトイベリア（おおよそ、現在のイベリア半島中央部、メセタと呼ばれる高原地帯に相当）を対象に、おもにケルトイベリア戦争時とローマ帝政期に焦点を当てて、彼らのアイデンティティに着目しながら、社会の実態を検討した。具体的には、ヌマンティアの指揮官レトゲネスとビルビリス出身の諷刺詩人マルティアリスの２人を取り上げ、両者のアイデンティティの考察と、ケルトイベリアの宗教の検討、とりわけ神々への信仰の分析をおこなっている。その結果、戦争期にはケルト的要素を保持していたケルトイベリアは、１世紀になると、ケルト・アイデンティティを人々は保持しながらも、同時にローマ人としての自覚を獲得しつつあり、彼らのアイデンティティは複合的なものになっていたという結論を得た。さらに、この状況がケルトイベリアの独自性が失われる端緒となったという見通しを示している。

このように、古代のケルト人に関し、宗教を中心にその実態を考察した上で、論者は次に、第２部（第４〜７章）において、中世以降のヨーロッパにおけるケルト人のイメージの変遷過程を詳らかにするよう努めている。

第４章は、古代から19世紀に至るまで「ケルト人」と「ガリア人」という呼称の用法を概観しつつ、両者のイメージがどのように変容してきたのか考察する。「ケルト人」

という呼称は、古代ギリシア人にとっては北方のスキュタイ人、東方のインド人などと対応する、西方を指す曖昧な地理的概念を基に認識されており、「ガリア人」という言葉は、西方の住民の中でより限定された集団を指す言葉として使われた。それに対し、ラテン語著作家たちは「ガリア人」という言葉をガリアに限定して用いてはおらず、この言葉自体をある種の「エスニシティ」に近いものとして認識しており、ギリシア語「ケルト人」と同義のものとされた。ルネサンス以降、古典学の発展とともに、ケルト人が注目されるようになると、ラテン語著作家たちの用法が人文主義者を通じてヨーロッパの知識人たちの間に広まり、「ケルト人」はあまり用いられず、「ガリア人」がステレオタイプ化されて、そのエスニシティが強く意識された。18 世紀になると、ポール・ペズロンらの影響で「ケルト人」と「ガリア人」の関係が逆転し、「ケルト人」の方がエスニシティを指す言葉と意識されるようになり、19 世紀以降考古学が発展すると、「ケルト人」が鉄器文化と結びつけられ、モノによってイメージが確立されて、いわゆる汎ケルト的枠組みが形成された。論者は以上のように、今日に至るまで影響力を持つ「汎ケルト的枠組み」の形成過程を説明するのである。

第 5 章以下では、「ケルト人」と「ガリア人」の用法に注意しながら、その表すところをより具体的に検討し、今日のケルト史像がどのように形成されてきたのか明らかにしている。まず第5章では、中世西ヨーロッパにおけるケルト・イメージを、中世における古典の伝承の問題との関連で論じた。具体的には、「聖者と学僧の島」と呼ばれるアイルランドにおける古典の伝承について、その実態を示した上で、1 世紀コルドバ出身の詩人、ルカヌスのテキストについて、中世におけるその伝承と 9 世紀頃ベルンで作製された古注、14 世紀頃のアイルランド語翻案の考察を通して、中世西ヨーロッパにおけるケルト・イメージを検証することを試みている。

第 6 章と第 7 章はともに、16 世紀から 18 世紀に至る「ケルト」像の形成過程を考察したものであり、それぞれ古典学者と好古家に焦点を当てて論じている。ケルトの枠組みの形成に関する通説では、スコットランドの人文主義者ジョージ・ブキャナンが、それまで大陸の人々に限定されていた「ケルト」という呼称の中にブリテン諸島の人々をも含ませ、いわゆる「島のケルト」論の先駆者となったとみなされている。また、ケルト人を、ケルト語を話す人々であるとする定義は、17 世紀後半のペズロン以降浸透したものであり、その後ウェールズ人の学者、エドワード・スィドによって「ケルト」の枠組みが形を整えられて普及していったと説明される。このような通説では、あたかもブキャナンが無から「島のケルト」という概念を作り出し、それが突然 17 世紀後半から 18 世紀の初めになってペズロンやスィドによって思い出され、恣意的に利用されたかのような印象を受ける。しかし、ブリテン島の住民を「ケルト」の中に含める用例は、ビザンツ時代の歴史書にも見受けられ、通説のような図式的整理には再考の余地が残されている。論者はこのような問題の認識に立ち、ケルト像の形成過程をより正確に把握しようと試みた。

第6章では、古典学の及ぼした影響を手掛かりとして、ブキャナンからスィドに至る「ケルト」観念の形成過程を考察した。通説では16世紀に「島のケルト」論が出現し、それはブキャナンを以て嚆矢とするといわれてきたが、論者の考察では、必ずしもブキャナンに始まるものではなく、ブキャナン独自の考えという訳でもなく、彼自身が先人の考えに基づいていることを認めており、ブキャナン以前にもブリテン諸島の人々を「ケルト人」の中に含む用例が見出されることが明らかとなった。また、スィドによって「ケルト」の枠組みが形を整え普及していったという見解に対しても、スィドが提供したのはあくまでも言語学上の枠組みであり、その枠組みを使い具体的なイメージを付与していったのはその後の好古家たちであって、「ケルト」の枠組みの普及に寄与したのは好古家の活動であったというのが論者の考えである。

そこで、第7章では、イギリス及びフランスにおける好古家の活動を概観しながら、彼らの「ケルト」観を考察した。16世紀末から18世紀にかけて、ケルト像が形成された際に大きな影響を与えたのは好古家と呼ばれる人々であったとの見通しを前章から得ている論者は、イギリスではウィリアム・カムデン（1551-1623）、ウィリアム・ストゥクリー（1682-1765）、フランスではケリュス伯（1692-1765）といった面々を中心に、この時期に好古家によって作られた「ケルト」の変遷を検討した。そして、好古家たちによって作り出された様々なケルト像を検討して、それらが18世紀後半まで1つに統合されることなく存在し続けたことを示した。

本論文で論者は、以上の7章にわたる考察によって、まず古代ケルト人の実像を明らかにすることに努め、その成果を踏まえた上で、次にケルト像の系譜を明らかにすることを試みた。そこからは、古代ケルト人が宗教、特に神々への信仰を重視し、その信仰は彼らの社会や文化、アイデンティティと密接に結びついていて、古代ケルト人の特質を解明するための極めて重要な要素であったことが明らかとなった。ガリアでは、ローマ帝国に征服された後も信仰を保持し続け、そのことがケルトの文化とローマの文化が融合し、ガロ＝ローマ文化を生み出すという結果をもたらしたのに対し、信仰を保持できなかったケルトイベリアではケルト文化は消滅してしまった。信仰の保持の有無という点が、ローマ帝国支配下におけるケルト文化の運命を左右する要因となっていたといえるであろうと論者はいう。ケルト社会における宗教の重要性は以前から指摘されているが、宗教を本論文のような観点から捉えた研究はこれまで存在しなかった。さらに綿密な論証は必要であるが、本論文の提示した観点から見るならば、「ガリア人は宗教に熱心である」というカエサルの記述は、ケルト人が単に信仰心の篤い人々であったというだけではなく、宗教を軸として営まれていたケルト社会の特徴を表現したものとして読み直すことが可能であると論者は考える。また、ケルトの表象についての検討から、論者は以下のように展望する。すなわち、近代の数百年の間に様々なケルト像が生み出され、近年ではケルトの存在を否定する「ケルト否定論」などの議論も起こったが、それは古代ケルト人の実態が未だ十分解明されていな

いためであり、今後ケルトに関する諸史料を改めて見直し、その特質をより正確に把握することで古代のケルト人の実態を明らかにしてゆけば、近年の議論にも有益な素材と視座を提供することができるであろう。

（論文審査の結果の要旨）

ローマ帝国が拡大する以前の古代ヨーロッパ世界には、ケルトと呼ばれる民族が広く居住していたと一般に説明される。彼らはイベリア半島から小アジアまで広がり、ブリテン島にも移住して、独自の文化を産み出したが、やがてローマ帝国に次々と征服されて同化してゆき、古代末期以降はゲルマン民族に征服されて、今日ではアイルランド、ウェールズ、そしてフランスのブルターニュ地方などの地域で、言語などに特性を残すのみであるとされている。このケルトの文化は長らく少数民族の文化として扱われてきたが、20世紀の後半に注目を集めるようになり、ヨーロッパ連合（EU）拡大にともなってケルトをヨーロッパ人共通の祖先として位置付けようとする試みもなされるほどになった。わが国でもその独自の美術が紹介され、また「癒し」の文化として人気を呼んだ。ところが、1980年代末、イギリスの考古学者の一部から従来のケルト理解に対する批判が生じ、ケルトの文化とされてきたブリテン島の遺物や遺跡に対する疑念が示され、さらに古代のブリテン島に大陸からの大規模な移住はなかったとの説が有力となった。批判は進んで、古代にケルトと呼ばれるような統一的な民族はおらず、「ケルト語」を話す人々をひとまとまりに「ケルト人」と呼んで独自の文化を持つ集団と解釈するようになったのは、近代のナショナリズムの政治的所産に過ぎないという「ケルト否定論」まで生まれた。この学説には学界の内外から反論が出されて、政治を巻き込む激しい論争となった。

本論文は、この難しい問題を孕んだケルトの歴史について、その基本をなす古代のケルト人の実態を歴史学の立場から検討しようと試みたものである。さらに、論者は、「ケルト否定論」の立場の学者たちがケルトは近代ナショナリズムの作り出した虚構と論じる際に批判の前提とした、近代のケルト像の形成過程をも検討する。そして、中世から近代にかけて形成されたケルト像を、その系譜とともに明らかにして、現代のより正確な「ケルト」理解に供しようとしたのである。本論文は、序論で研究史と検討課題を明確にした後、第１部の３章で古代のケルト人とその文化の実態を分析し、第２部の４章でケルトの表象について分析している。研究成果とその評価は、おおむね次のようにまとめることができよう。

（1）「ケルト」をめぐる議論の出発点であり基盤となっているのは古代のケルト人の実態であり、長い研究史にもかかわらず、今日もこれが充分には解明されていないことが問題を複雑にしている。論者は、本論文第１部の３章で、歴史学の立場からこの問題の検討に挑み、ギリシア語、ラテン語、そしてガリア語で残された記録を丹念に分析して、古代ケルト人の実像を史料の許す限り精緻に明らかにした。本論文は、わが国では初めての本格的な古代ケルトの歴史学的研究であり、欧米の研究に対する批判的姿勢から生まれた議論の組み立ての点で、国際的な独自性も有すると評価できる。

（2）本論文で最も注目されるのは、ガリア地方（おおむね現在のフランスに相当）にみられた宗教の実態を分析した第２章であり、古代ケルト人がローマ帝国支配の下で「ロー

マ化」に対応しつつも信仰の独自性を存続させていったことを明らかにしているが、その際の碑文史料を用いた調査は詳細を極め、神々の添え名の分析など圧巻であり、論者の調査能力の高さを示している。

（3）通説では、16世紀スコットランドの人文主義者ジョージ・ブキャナンが、それまで大陸の人々に限定されていた「ケルト」という呼称の中にブリテン諸島の人々をも含ませ、いわゆる「島のケルト」論の先駆者となったとされている。また、ケルト人とはケルト語を話す人々であるとする定義は、17世紀後半のポール・ペズロン以降浸透したものであり、その後ウェールズ人の学者、エドワード・スィドによって「ケルト」の枠組みが形を整えられて普及していったと説明される。「ケルト否定論」の学者たちは、この通説を基にしてケルトが近代に「作り出された」と指摘する。これに対して論者は、ブキャナン以前にもブリテン諸島の人々を「ケルト人」の中に含む用例が見出され、またスィドが提供したのはあくまでも言語学上の枠組みであり、その枠組みを使い具体的なケルト人イメージを付与していったのはその後のいわゆる好古家たちであって、「ケルト」の枠組みの普及に寄与したのは好古家の活動であったとする。論者は、中世から近代にかけての関連する膨大な文献を渉猟した上で通説とは異なる見解を導き出しており、とりわけイギリス・フランスの好古家の著作を分析した点は注目すべきであろう。また、独自にケルト解釈の系譜を明らかにした点も貴重である。

（4）論者は「ケルト否定論」には批判的であり、古代に「ケルト人」という独自の文化を有した人々の存在を認める立場に立つ。そして、「ケルト否定論」の学者たちが前提とした近代におけるケルト像の形成過程に関する通説的説明を批判して、（3）で述べたような独自の見解を提示し、「ケルト否定論」が的はずれであることを指摘する。しかし、同時に、古代のケルト人とケルト文化を受け継ぐとされるいわゆるウェールズなどケルト的辺境とを結びつけるような「汎ケルト的」理解にも問題があるとしている。こうした客観的批判的な研究姿勢はヨーロッパ人研究者には容易には見出せないもので、評価してよいであろう。

わが国には日本ケルト学会という学会組織があるが、参加者は言語学や文学、美術史などを専攻する研究者がほとんどであり、西洋古代史の立場から本格的にケルトを研究するのはわが国では論者一人といってよい。また、古代から近代にかけてのケルト解釈の変遷を幅広くたどる研究は欧米にもほとんどなく、論者の学界に対する貢献は大きいものがある。ギリシア語・ラテン語・ガリア語史料を丁寧に分析するだけでなく、アイルランド語をはじめ近代諸語で書かれた文学作品や好古家の歴史物などを分析して導き出した成果は、「ケルト否定論」を批判する有力な学説となろう。もっとも、「ケルト否定論」を完全に論駁するためには、歴史概念の意義と有効性を念頭に置きつつ、ブリテン島の古代の問題とヨーロッパ近代のケルト解釈についてさらに立ち

入って考察するべき論点がいくつかあると思われる。また、古代のケルトを論じる際、考古学の知見がまだ充分には用いられていない点が惜しまれる。しかし、これらの点は論者の今後の研究で補われることは間違いない。とくに、論者は2年間のフランス留学で考古学研究にも親しんでおり、今後はさらに考古学の知見を動員した研究を進める予定であるので、大いに期待したい。

以上審査したところにより、本論文は博士（文学）の学位論文として価値あるものと認められる。2010年1月27日、調査委員3名が論文内容とそれに関連する事柄について口頭試問をおこなった結果、合格と認めた。